

『桃山学院大学学生論集』第29号の発刊にあたって

学長 前田 徹 生

学生懸賞論文、学生研究発表大会に参加され、見事入賞を果たした皆さん、おめでとうございます。

今回の学生懸賞論文の応募本数は77編となり、昨年度より残念ながら少し減少しました。学生研究発表大会においても、発表数は50グループ・個人と昨年度よりやや減少しましたが、参加学生数は27名増加し、196名の参加となりました。こうして年々参加者が増え、大会が盛会になるのも、指導する先生方の熱意、勉学への学生諸君の熱意の結晶であり、心温まる思いがいたします。

さて、今回の応募状況ですが、学生懸賞論文では、所属ゼミ・テーマで分類した学部別の投稿件数は、経済34編、社会26編、経営6編、国際教養10編、法1編となり、一方の学生研究発表大会では、経済、社会、経営、国際教養の4学部から参加がありました。

次に、審査結果ですが、学生懸賞論文では、今回も学長特別賞は該当がなく、優秀作1編、佳作3編、準佳作3編という結果でした。学生研究発表大会については、優秀賞1グループ、佳作8グループ、準佳作10グループとなっています。

取り上げられたテーマを見ますと、学生懸賞論文、学生研究発表大会ともに、大阪の経済・金融問題、福祉問題、自治体に関する問題等、社会情勢を強く反映したテーマが多く見られました。このことから、社会に対する問題意識を深める機会として、学生懸賞論文、学生研究発表大会が大きな役割を担っていることを再確認することができました。

問題を設定し、仮説を立て、それを検証して、結論を導く。こうした研究

活動は大学教育に特有の訓練方法であり、社会で生起する様々な問題を解決するための基本スキルを高めるもので、大学教育の根幹となるものです。大学としても、こうした研究活動の成果の発表の場としての懸賞論文や研究発表大会を今後も積極的に支えていきたいと考えております。

本学のHPを見ますと「世界が変わる体験がある」という標語がありますが、桃山学院大学は「世界が変わる体験のできる大学」作りを目指しております。現代の若者はバーチャル・リアリティーという言葉に象徴されるように非現実性の強い環境に置かれています。こうした「実体験」に乏しい若者に、海外留学や国際・国内ボランティア活動、課外活動やサークル活動、実践教育やフィールド・ワーク等々、様々な「実体験」を通じて、学生一人一人の内発性を高め、潜在的能力を引きだし、勉学に対する意欲、社会に関わろうとする意欲を喚起することが大切であると考えております。「学生懸賞論文」「学生研究発表大会」「ディベート大会」もこうした「世界が変わる体験」の一つとしてこれからも大いに盛り立てていきたいと思っております。

最後になりましたが、学生懸賞論文、学生研究発表大会の準備、運営にご尽力された教員ならびに職員の方々に、心からの感謝の言葉を申し上げます。